

## 待降節第一主日

2013.12.1

マタイ 24・37-44

教会の典礼暦はこの一年間の信仰年を経て、2014年度の新たな待降節を迎えています。信仰年のうちに過ごして来た今年も十二月を迎え、あわただしく過ぎて行く日々の中で、信仰年の実りとして、私たちの信仰に心に向ける最もよい方法は、典礼暦に従ってささげられるミサの中で朗読される聖書のみことばに心の耳を澄ますことです。今日から始まる待降節のミサの中に響く聖書のみことばが、私たちに訴えかけていることは、私たちが信じているイエス・キリストは、私たちが生きる日々の中に来てくださるお方であるということです。心を新たに、私たちが信じている主イエス・キリストを私たちの中にお迎えする用意を整えることが、信仰年を終えた今の、私たちの新たな心構えとなるよう祈りたいと思います。

洗礼を受けることによって、私たちは教会において伝えられてきた私たちの主イエス・キリストを信じる信仰を生きる者たちとなりました。日曜日のミサの度ごとに、私たちは私たちが信じている主イエス・キリストへの信仰を信仰宣言の祈りによって表明しています。

『天地の創造主、全能の父である神を信じます。父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、陰府に下り、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます』。

私たちを取り巻く世界の現実の中でそれぞれの人生の日々を生きている私たちは、洗礼を受けてカトリック信者となることによって、天地の創造主、全能の父である神と神のひとり子であるイエス・キリストを信じる者たちとなったのです。私たちが信じている主イエス・キリストは、この世界の現実の中でそれぞれの人生の日々を生きる私たちに、天地の創造主、全能の父である神への信仰をもたらすために、聖霊によっておとめマリアから生まれ、この世界の現実の中に来てくださった神の子です。十字架の死に至るその生涯を通して、天地の創造主、全能の父である神への信仰を私たちに示すために神のもとから私たちの現実の世界に来てくださった神の子であるお方です。福音書に語られているそのようなイエスを私たちは、私たちの主イエス・キリスト、私たちの救い主として信じています。

イエス・キリストを私たちの救い主と信じるということはどのようなことで

あるのでしょうか。イエス・キリストは私たちにどのような救いをもたらしてくださるのでしょうか。この世界の現実の中に生きる私たちに、天地の創造主、全能の父である神を信じる信仰をもたらしてくださったことによって、イエス・キリストは私たちの救い主なのです。このような世界の現実の中で、それぞれの日々を生きている私たちを天地の創造主、全能の父である神を信じる者たちとしてくださったことが、イエス・キリストが私たちにもたらしてくださった救いなのです。このような世界の現実の中で、天地の創造主、全能の父である神を信じるなどということは、私たちの現実感覚をもってしては不可能なことです。この世界に繰り広げられている様々の悲惨な出来事は、私たちのカトリック信者としての信仰を絶えず揺さぶり続けています。そのような現実の中に生きる私たちは、自分の力をもってしては、天地の創造主、全能の父である神を信じる信仰を保ち続けることは出来ないのです。信仰が私たちの力によるものであるなら、この世界の現実が私たちに襲う時、天地の創造主、全能の父である神を信じる信仰は、幻想に過ぎないことになってしまうことでしょう。この世界の現実の中で、その現実の悲惨さと相対して、天地の創造主、全能の父である神を信じる信仰は、十字架の上に死んだ神の子イエス・キリストによってこの世界にもたらされたのです。十字架の死の苦悶の中で、「わが神よ、わが神よ、なぜわたしをお見捨てになられたのですか」と神に向かって叫ばれた、死の苦悶に臨んでもなお神に向かって、わが神よ、わが神よと叫び続ける信仰によって、私たちの主イエス・キリストはこの世界の現実の極限の姿である悲惨な十字架の死に打ち勝たれたのです。イエス・キリストの復活は、天地の創造主、全能の父である神への信仰をこの世界にもたらされたイエス・キリストの十字架において示されているこの世界の現実に対する信仰の勝利を意味しています。

待降節のミサの中に響く聖書のみことばは、この世界の現実を前にして萎えてしまう私たちのカトリック信者としての信仰を奮い立たせるみことばです。

今日の福音に響くみことばは、この世界の遠い将来に起こるこの世界の終末を語っているのではありません。

「その日、その時は誰も知らない。・・・人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、娶ったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気付かなかった。人の子が来る場合もこのようである。その時、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰ってくるか、あなたがたには分からないからである。」

二年半がたった大震災と大津波の被災地では、そこで多くのいのちが失われた震災遺構の保存を巡っての、あの津波で愛する者たちを奪われた人々の心の葛藤が報じられています。その人々は、あの時、今日の福音に語られていることを実際に経験したのです。そして、あの時、その人々は経験したことは今もその人々の心から消えることはないのです。この一年の間にも、私たちは大島やフィリピンを襲った悲惨な自然災害に巻き込まれた人々姿を映し出す報道に接してきました。シリアの悲惨な現実の中に生きる人々の日々は今も続いています。

今日私たちが聴いた聖書のみことばは、私たちが信じている、この世界に来てくださる、十字架の死を身をもって体験された神の子のこの世界の現実に向けて語られているみことばです。十字架の苦しみの底からなお神に叫び続けることによって、この世界の全ての者に父なる神への真の信仰の姿を示され、そのようにして新たにこの世界に来てくださる神の子のみことばです。このミサの中で、そしてこのミサから始まる一週間の日々の中で、今日の福音のみことばを心のうちに思い巡らして行きたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高